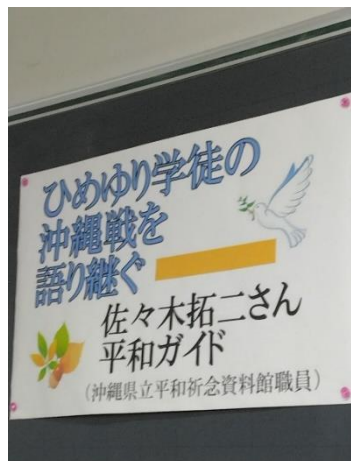


# 鷺宮高校 社会科FW・活動通信 Vol.41(2025. 11 月)

## 社会科同好会編③ 「戦後・被爆 80 年 高校生平和のつどい」

2025年11月23日(日)午後、生徒3名＋社会科教員3名で、「戦後・被爆80年 高校生平和のつどい」(会場：成城中高)に参加し、全体会で児玉三智子さんから被爆証言を聞き、分科会・感想交流会での司会を担当しました。後日、3人は『朝日新聞』に感想を投稿しました。以下にその文面を載せます。



◆ひめゆり学徒の戦争体験を聞いて胸がぎゅっと苦しくなりました。自分と同じ高校生くらいの年齢の人達が、勉強したい気持ちや家族と過ごす時間さえ奪われ、突然“戦場”という全く別の世界に放り込まれたことを想像すると本当に言葉を失います。負傷兵の看護や壕での生活、そして仲間を失う恐怖。どれも私達が普通に生きている毎日の延長線上には絶対にありえません。一番心に残ったのは、彼女達が「生きたい」と思うことさえ許されないような状況にいたということです。戦争は人の命だけでなく、希望や未来までも奪うものだ強く感じました。平和が当たり前だと思ってしまうことがあるけれど、その「当たり前」は多くの犠牲の上に成り立っているのだと気づきました。彼女達の体験を知ることとは過去を知るだけでなく、同じ悲しみを二度と繰り返さないための責任だと思います。私達一人ひとりが平和について考え、行動し続けることが大切だと改めて感じました。



◆全体会では、児玉さんが被団協のノーベル平和賞受賞について、喜びだけでなく被爆された方全員で授賞式に出席するという夢が叶わなかったことへの悲しみの気持ちもあると仰っていて、共に

活動してきた方々への深い思いが伝わってきた。被爆当時のことを情景が浮かぶほど詳しく教えて下さり、周りが亡くなっていく精神的な辛さがあったことも分かった。分科会では、佐々木さんからひめゆり学徒隊の話聞いた。生徒が残した手紙や最後の言葉から、明るさの中にある恐怖や、家族や友達と別れる悲しみが伝わり、同じ学生として胸が苦しくなった。戦争を体験した方のお話を聞ける機会が減ってしまうことについて佐々木さんは、戦争を経験した人の話を聞いた私達が後世に伝えていく必要があると仰っていた。戦後80年がたち、戦争を経験された方は数少ない。だからこそ今回のような貴重な機会を無駄にせず私達がお話を受け継いでいくべきだなと感じた。

◆私達は、分科会で沖縄戦に関する分科会の司会を担当するための事前学習として、高校でアニメ『cocoon (コクーン)～ある夏の少女たちより～』(原作・今日マチ子)を見て感想を話し合ったりしました。それでも今回、佐々木拓二さんからひめゆり学徒に関する話を聞き、改めて強い衝撃を受けました。自分とほとんど年齢の変わらない子ども達が殺されたり、死を選ぶような状況に追い込まれていたという事実はやはり、信じがたいものでした。さらに、まるで自分はもう死ぬのが決まっているかのように周りに話し、それを誰も止められず、むしろ同調してしまっていた環境が本当に恐ろしいと思いました。

こうした過去の悲劇を二度と繰り返さないためにも、私達は戦争の現実を学び続け、被害者を増やさない努力をする必要があると強く感じました。